

アカウミガメの産卵地保全に着目した里海保全に関する研究 －マルチステークホルダー会議の開催を通して－

田中 章 研究室

1131122 高柳 遥平

1. 研究の背景と目的

海浜空間は人間社会と自然界の緩衝地帯であり、防護・環境・利用のすべてにおいて重要であるが、今日の日本では急速にその空間が失われつつある。それに対し、人手をかけて生物生産性と生物多様性を高めた沿岸域の創造・復元を行う「里海」という概念が注目されている

(柳, 2006)。田中 (2010) によって日本型生物多様性バンキング“里山バンキング”が提言されており、この里山には里海も含まれている。里山バンキングは生態系としての機能を損なわないレベルで、人間が里山を利用することも認め、利用程度に応じて、利用者も里山管理を行う仕組みである。

東京都市大学環境学部環境創生学科田中章研究室では静岡県下田市において 2011 年より毎年夏に多様なステークホルダーを招き、アカウミガメ保全のための勉強会を開催している。本年度開催した勉強会后、来場した各ステークホルダーとアカウミガメ (*Caretta caretta*) の保全を目標に様々な活動を行った。

以上の事から、本研究では下田市の沿岸域を保全するうえでアカウミガメをシンボルとして利用し、保全することが下田市において豊かな里海を実現させるための有効な施策に繋がると仮定し、今後の里海保全の在り方について考察することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、静岡県下田市において 4 度にわたり多様なステークホルダーを集めたアカウミガメ保全のための勉強会や勉強会終了後に行った来場者アンケートを整理した。また、来場した各ステークホルダーと当研究室により実際に下田市においてアカウミガメ保全活動を共同して実施した。これらを通して、下田市におけるアカウミガメ保全の在り方について考察した。

表 1 勉強会の開催日と来場者数

勉強会	開催日	来場者数
第 1 回	2011 年 8 月 30 日	6 人
第 2 回	2012 年 8 月 26 日	8 人
第 3 回	2013 年 9 月 03 日	29 人
第 4 回	2014 年 9 月 03 日	48 人

3. 研究結果

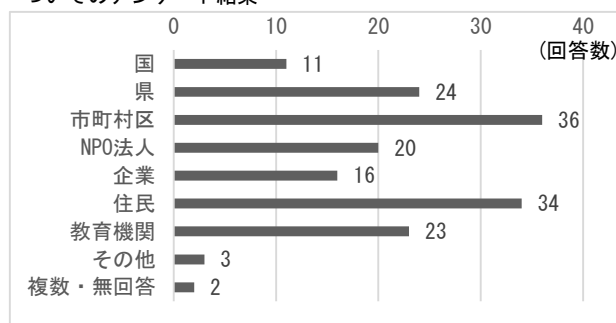
3-1. マルチステークホルダー会議の開催

静岡県下田市において、過去 4 回のアカウミガメの保全のための勉強会の準備から会の終了後までをまとめた (表 1)。第 3 回勉強会からは地元新聞社等に協力を依頼し一般公開で、アカウミガメの産卵環境である砂浜の保全についての議論が行われた。第 3 回勉強会での議論や会終了後のアンケート結果より、本勉強会がアカウミガメ保全に関して合意形成を行う場として重要な役割を担っていることが明らかになった (板倉, 2013)。アカウミガメの保全体制に着目して開催した第 4 回勉強会において、当研究室の学生が、アカウミガメが毎年下田市の砂浜に産卵のため訪れていることを周知するステッカーや、砂浜利用者に対しアカウミガメへの配慮を呼びかける看板の提案を行った。その結果、今後の下田市での具体的なアカウミガメ保全活動へと繋がる会となった。勉強会終了後に行った、下田市において誰がアカウミガメ保全に携わる必要があるかという内容のアンケート調査 (表 2) に対して、住民や教育機関、企業の回答数が多いことから、産官学民による連携を望まれることが明らかとなった。

3-2. 各ステークホルダーとのアカウミガメ保全活動の実施

アカウミガメ保全のための勉強会に参加した各ステークホルダーとの協働の可能性について整理し、各ステークホルダーに対し提案を行った。その結果、伊豆急行株式会社と静岡県と下

表 2 下田市でアカウミガメ保全に関わることが望ましい団体についてのアンケート結果



田海中水族館と共同して、第4回勉強会の際に提案したステッカー(図1)の作成を行った。また、伊豆急行株式会社とは、伊豆急下田駅に展示されているウェルカム水槽の横にアカウミガメに関するポスターを設置した。また、静岡県と静岡県立下田高校や伊豆海洋自然塾と共同し、下田市におけるアカウミガメの認知度調査を295人に対して行った結果、下田市にアカウミガメが産卵に訪れていることの認知が23%と低く、今後、アカウミガメの周知活動を行うことの重要性が示唆された。下田市に対して、砂浜の利用者に対し、アカウミガメへの配慮を呼びかける看板(図2)についての提案した結果、看板を設置することが決まった。

4. 結論と考察

アカウミガメをシンボルとして捉えた結果、図3のように下田市で様々なステークホルダーを交え活動を行うことが出来た。これは保全目標種を明確に定めたことにより、具体的な活動に結び付いたと考えられる。マルチステークホルダーを集めて議論を行ったことにより、多方面から共同の可能性を見出すことができ、この

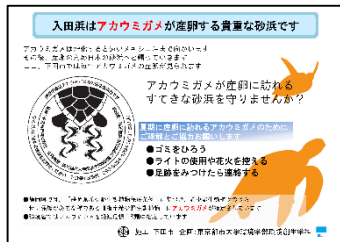


図1 筆者がデザインし配布した周知ステッカー

図2 下田市と共同で作成した設置予定の看板案

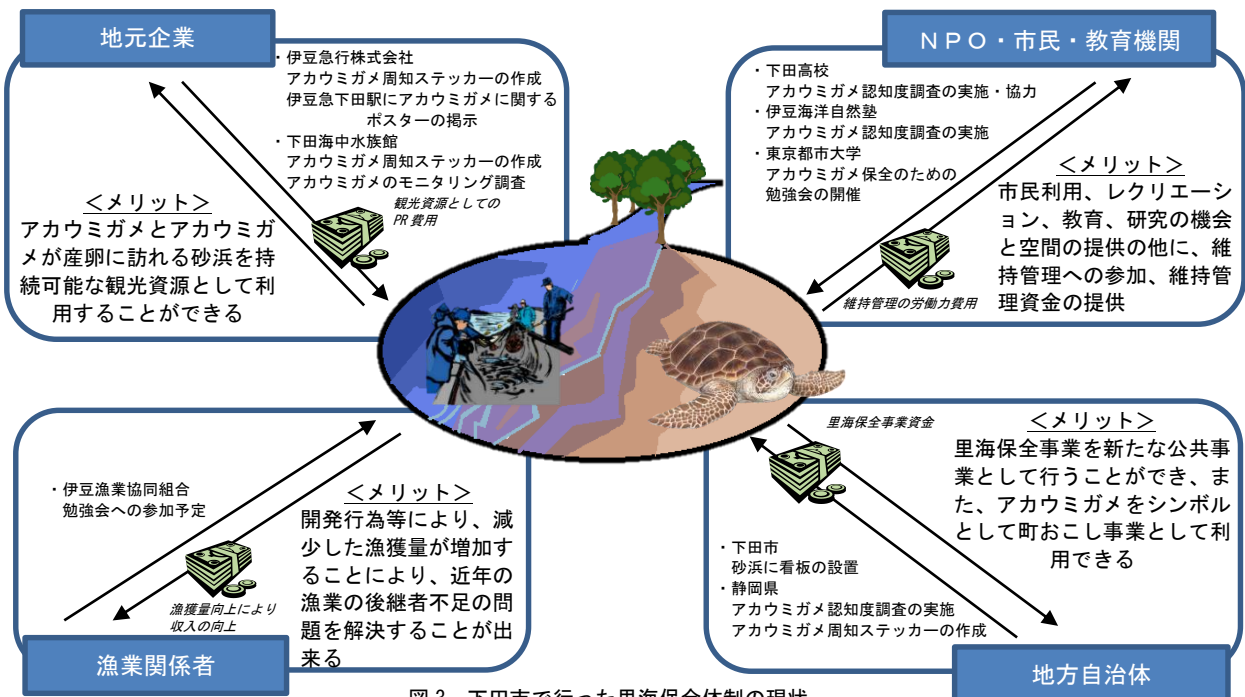


図3 下田市で行った里海保全体制の現状

ような活動に結び付いたと考えられる。

多様なステークホルダーを集めた本勉強会のような議論の場を設けることで、多方面からアカウミガメ保全に関する意見を集めることができた。このことから、アカウミガメをシンボルとして里海保全を行うことで、アカウミガメだけを保全するといった体制が構築されるという危険性も考えられるが、継続的にこのような議論の場を設け、保全計画の合意形成がなされれば、そのような保全体制が構築されることは避けられると考えられる。

今後は、豊かな里海を実現させるために「保全しながら利用する」といった考えを産官学界が共通の理解として持つことで、各方面に対しメリットが発生し、アカウミガメの保全を行うことができると考えられる。このメリットを継続的に発生し続けるためにも里海バンキングのような経済的手法を導入することが望ましいと考えられる。また、下田市は伊豆半島ジオパークに属しており、大地が育んだ貴重な資源の保全と活用によって経済・文化活動を高めて、地域振興に繋げる(静岡, 2011)といった考えを持っている。ジオパークの概念と里海バンキングの概念は酷似しており、より豊かな里海の形成と持続的な利用を行い、地域振興に繋げるためにも、これら2つの概念を統合して里海保全に用いることが下田市では可能であり、かつ重要であると結論づけた。

【主要引用文献】

- 板倉肇 (2013) アカウミガメ産卵環境保全に関する合意形成へのHEP適用—下田市をケーススタディとして—
- 田中章 (2010) 里山のオーバークユースとアンダーユース問題を解決する“SATOYAMAバンキング”—生物多様性バンキング・戦略的環境アセスメントと里山保全の融合。p47-51, 環境自治体会議, 環境自治体白書2010年版, 生活社, 東京都, 180pp.
- 静岡県 (2011) 伊豆半島ジオパーク構想指針書, 176pp
- 中山充 (2011) 里海と環境共同利用権, 沿岸海洋研究, 第48巻, 第2号, 149-154pp
- 柳哲雄 (2006) 里海論, 恒星社厚生閣, 東京, 102pp